

モスピラン30周年

モスピラン[®]剤上市 30 周年に寄せて

日本農薬株式会社
長谷部 元宏
Motohiro Hasebe

1. はじめに

モスピラン[®]は、日本曹達株式会社様（以下、日本曹達）が開発したネオニコチノイド系殺虫剤として、販売開始以来 30 年にわたり、園芸・畑作・果樹の幅広い分野で広く使用されてきました。日本農薬株式会社（以下、日本農薬あるいは当社）は、その販売に携わるパートナーとして日本曹達とともに普及・活用の最前線を歩んできました。本稿では、導入の経緯、営業・普及の取り組み、普及会活動を通じた価値最大化、そして 30 年間の歩みを、当社の視点から振り返ります。

2. 日本農薬がモスピランを取り扱うに至った経緯

外資系メーカーからの多品目引き上げにより当社の品目構成が揺らぐなか、当社はモスピラン（開発コード：NI-25）の導入に向けた評価を開始することになりました。当社でモスピランの評価が始まったのは 1992 年頃、研究拠点（生物研究所）が大阪府河内長野市の市街地にあった時代です。当時当社は水稻向け薬剤が主体で、畑地の評価環境は限られており、猫の額ほどの圃場にキャベツ等を植え、わずかな果樹を使用して、不慣れながらも NI-25 の評価を開始しました。野菜や果樹のアブラムシに対する突出する効果はもちろんのこと、なかでも印象的であったのがゴマダラカミキリに対する効果です。当時のネオニコチノイド剤は、イミダクロプリドの水稻箱処理剤として委託試験で強烈に世間に印象付けた時代であり、ネオニコチノイド剤はどちらかという水稻が主体で、ゴマダラカミキリに対する優れた効果はまだ知られていませんでした。本種の発

生が多い和歌山の隣県に研究所がある地の利を生かして採集、評価を行い、効果があることを確認することができました。当時、本種に対して有機リン剤の効果が低下していたため、本剤に対する期待が一層高まりました。

モスピランはイミダクロプリド、ニテンピラムなどのネオニコチノイド剤と同系統でありながら、カメムシ目、コウチュウ目、ハエ目に加えて 2 剤と異なるチョウ目害虫に対して実用的な効果を有する特長を確認できたこと、そして水稻登録こそありませんでしたが、殺虫スペクトルの広さと収穫前日数の短さ、そしてミツバチへの影響が小さいことから、園芸・畑作分野で広く使える剤として期待できるため導入判断することとなりました。日本曹達は、モスピランの販社として系統メーカーを起用する選択肢もありながら、当社の販売力に期待して選んでいただいたと考えています。そしてモスピランが日本曹達×日本農薬の初めての本格的なパートナーシップの起点となり、その他製品へとつながっていくこととなります。

3. 日本農薬の営業と普及から見たモスピラン

モスピランは、日本曹達と日本農薬とで普及会を発足し普及に取り組んできました。当社の普及会への参画はモスピランが初めてではありませんでしたが、普及会としてしっかりとマーケティングし、普及活動を行ったのはモスピランが初めてとも言えます。日本曹達における評価が十分に進んでいたことに加え、当社でも評価を行い、日本曹達を中心に普及会としてエビデンスに基づく普及方針を示していただきました。日本曹達が普及会として明確な方針を示し、両社で協議・対策を練る体制が確立してい

たことは、モスピランの最大化に大きく寄与したと
考えています。

モスピランは適用幅が広いことから、地域ごとで
はなく、作物を軸に市場解析を実施し市場戦略を立
てていきました。先行剤に対しては、短い収穫前日
数の訴求、チョウ目への効果、ミツバチへの影響が
小さいことを柱に差別化し普及しました。後続剤が
出始めると、モスピランがターゲットとなり低価格
戦略による厳しい局面に苦勞することとなりました。
しかし、カイガラムシやユキヤナギアブラムシ
等での優位性を前面に出し、防除暦内の最適ポジ
ションを維持し、今に繋がっています。

ここでいくつか現場エピソードをご紹介します。
青森のリンゴでは2008年頃、アブラムシ効果の低
下が懸念されました。現場から残効が短いと声が出
た局面でも、試験を実施して効果を提示することを
繰り返し、ポジションを変えながらも現在も変わら
ず維持しています。静岡の茶では、ヨコバイ・アザ
ミウマに加えてチャノホソガが大きな特長となり、
競合するネオニコチノイド剤の牙城を崩す成果を上
げました。カンキツにおいては、当初競合剤との価
格面から普及に難航しましたが、モスピランSL液
剤の開発に伴い、価格対策を併用して巻き返しを図
ることができました。他の果樹等においても後続の
ネオニコチノイド剤との競合が激化し、防除暦の最
良ポジションを常に狙われる状況の中、効果・検証・
連携した対策で数々の防衛を果たしました。また、
北海道でテンサイの西部萎黄病が問題化した際に、
日本曹達が他社に先駆けて適用拡大を進めたこと
で、他社に優る成功を取めました。日本曹達による
こうした迅速・理想的な適用拡大は、剤の延命・最
大化に大きく寄与したと考えています。

4. 日本農薬から見たモスピラン 30 年の歩み

当社にとってモスピランは、厳しい時代を支えて
くれた重要な薬剤です。殺虫スペクトルや適用作物
の幅が非常に広く、現場からの適用拡大要望やマー

ケティング戦略に基づき、いち早く登録拡大が進め
られたことで、当社としては提案しやすく、困った
ときに頼れる存在です。園芸分野では、現在もネオ
ニコチノイド剤の中で売上 No.1 を維持しており、
これは日本曹達のリーダーシップと本剤に対する一
貫した姿勢の表れだと考えています。

モスピランは、日本曹達と当社にとって初めての
本格的なパートナーとなった薬剤であり、その後、
トップジン M やフェニックスへと関係が広がる
きっかけになりました。当社は自社品同様の思い入
れを持って販売しており、日本農薬が開発したフェ
ニックスを日本曹達へ導出した背景には、モスピ
ランでいただいたご厚意への感謝と、その信頼関係
を継承したい思いがあります。

さらに、それまで他剤であった原体メーカーと販
社としての関係とは異なり、同業他社による共同で
のマーケティングや社員同士の交流が活発で、とき
には競合する場面があっても、本質的には大切な
パートナーという文化が醸成されました。青森で
の競合ネオニコチノイド剤対策など、日本曹達と肩を
並べて現場対応したことは、その象徴的な事例です。

5. おわりに

この30年、モスピランは作物登録の広さ、害虫
スペクトルの広さ、ミツバチへの影響が小さいとい
う特長を軸に、環境調和型の製品として今なお重要
な位置づけを保っています。日本曹達が当社の販売
力を信じて当社を選んでくださったこと、そして迅
速な適用拡大・普及方針の明確化で価値を共に最大
化してきたことに、心から感謝申し上げます。

モスピランによって築かれた信頼は、トップジン
M、フェニックスへ連なる長期的パートナーシ
ップへと発展しました。今後も、日本曹達様ととも
に、現場の課題解決に資する実証と普及を重ね、モ
スピランの価値を次の10年、20年へつないでまい
ります。